

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：17601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730692

研究課題名(和文) 社会道徳的雰囲気的确立を目指す幼児教育・保育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of educational program for early childhood education and care to aim at establishment of sociomoral atmosphere

研究代表者

椋木 香子 (Mukugi, Kyoko)

宮崎大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：00520230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、乳幼児期の道徳性の発達に即した幼児教育・保育のカリキュラムや指導方法のプログラムを保育現場と協働で開発することを目的としている。そのために研究期間において、乳幼児の道徳的認知発達に関わる諸要素を明らかにするとともに、海外の保育実践と比較して、我が国の社会的・文化的背景に即した道徳性育成について示唆を得ることを目的とした。

1歳から5歳までの積み木遊びにおける遊びの発達と他者関係認識について調査した結果、幼児の道徳性は認識能力や身体能力の発達と関連があることが示唆された。また海外の実践事例との比較から、カリキュラムについての考え方の違いが指導方法に影響していることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a curriculum and a educational program that accorded with the moral development of the babies and young children with teachers and practitioners of early childhood education and care. Therefore, in this study period, I was aimed at clarifying some elements about moral cognitive development of babies and young children, and getting some suggestions about the morality upbringing that accorded with a background of culture and society of our country by comparison with foreign childcare practice.

As a result of research about development of play and recognition of relations to another person in block play from 1 year old to 5 years old, it was suggested that the morality of infant was related with the development of cognitiv ability and physical ability. In addition, it was suggested that differences of a way of thinking about a curriculum influenced educational methods by comparison with foreign practice example.

研究分野：幼児教育・保育、道徳教育

キーワード：幼児教育・保育 道徳教育 道徳性 積み木遊び

1. 研究開始当初の背景

(1) 我が国の幼児教育・保育のカリキュラムでは、乳幼児期においては、道徳性の「芽生え」を培う時期とされ、内容としても5領域の中で断片的に扱われているにすぎない。我が国の幼児教育・保育現場では道徳性育成は各保育者の力量に委ねられているのが現状である。乳幼児期の道徳性育成は基本的な生活習慣形成の支援・援助に深くかかわるために、かえって指導のポイントが分かりにくくなっていると考えられる。

(2) これに対し、Rheta Da Vries & Betty Zan (1994)によれば、乳幼児期においてもコールバーグの言う「道徳的雰囲気醸成」が有効であることが示唆されている。これは、共同体が民主的・道徳的な雰囲気を持つことで、その共同体に属する個人の道徳性が高まることに注目した教育方法に関する研究である、「The Just Community Approach」(Power, Higgins & Kohlberg, 1989.; J・ラマー他、2004 など)に依拠したものである。

(3) Rheta Da Vries & Betty Zan (1994)によれば、「道徳的雰囲気醸成」の方法として、「葛藤を解決すること」「グループ・タイムを設けること」「ルールを作ること」「投票を行うこと」「社会的・道徳的討論を行うこと」などが示されている。これらの教育方法だけを見ると、我が国でも同様の実践が行われている。しかし、子どもの認知レベルでどのように道徳性が発達しているのかについては、大きな差があるのではないかと考えられる。そしてそれは、文化的背景、社会的背景、教育・保育カリキュラムの原理的差異など、さまざまな要因により規定されていると推察できる。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、幼児期の子どもの道徳性がどのようにして発達するかについて、認知構造主義に基づいた実践事例分析を行う。特に、社会道徳的雰囲気醸成の確立に関連が深いと考えられる「グループ討論」「葛藤の解決」「ルール作り」に関して、我が国と諸外国の実践を比較することで、我が国の特徴を抽出することを試みる。

(2) また、カリキュラム・レベル、保育者の意識レベルの比較を行い、社会文化的差異の影響を検討した上で、子どもの発達過程に即した社会道徳的雰囲気醸成の確立を目指すカリキュラム・指導方法について、保育現場と協働し、プログラムを開発する。

(3) 今回の研究期間では、幼児の道徳的認知発達に関わる諸要素を抽出し、幼児の道徳性の発達に即した支援の在り方を検討する

こととした。

子どもの道徳的認知発達に関わる諸要素として、「認知的特徴」「人間関係認識」「規範意識」「遊びの発達」「葛藤の解決」「集団づくり」「討論(話し合い活動)」の7つの観点を設定した。先行研究から、3歳が認知発達の転換点になると考えられたため、1~2歳、3歳、4~5歳の年齢に分けて、発達指標の仮説を設定し、これらを分析視点とした。

3. 研究の方法

(1) 本研究は 道徳教育及び事例分析視点に関する文献研究、 実践事例の観察及び分析、 実践事例の国際比較研究、 プログラム開発の4つの手法で構成される。効率的に調査研究を進めるため、これらを並行して実施しながら、随時結果をそれぞれの研究にフィードバックした。随時、協力園の園長、研究協力者の助言等を分析視点に反映させ、仮説生成的なアクション・リサーチを実施した。

(2) 文献研究では、認知主義的道徳性発達理論に基づく幼児教育理論として、Rheta Da Vries & Betty Zan (1994)に、幼児期の道徳教育に関しては Spodek & Saracho(2006)に基本的に依拠して、分析視点・調査方法の設定を行った。

(3) 実践事例の観察及び分析では、2つの保育園と1つの幼稚園で横断的・縦断的な調査を実施した。

調査園	調査対象	目的
めいつ保育園	0~5歳児	遊び・認識の発達の 通年観察
立正幼稚園	2・3歳児	保育園児との比較
南方保育園	3~5歳児	集団づくり 実践事例観察

研究初年度に調査方法を検討した結果、子どもの道徳的認知発達に関わる諸要素を抽出するための事例として、積み木遊びに注目して分析を行うこととした。さらに、研究当初の仮説では3歳が道徳的認知発達の転換点と考えられたが、観察調査から2歳以前がより重要と考えられるようになったため、調査対象や調査回数の変更を行った。

【調査方法の概要】

各クラス(年齢別)で子どもの積み木遊びの様子を20~30分間観察した。観察記録はメモのほか、4点からの定点固定のビデオ撮影と、フリーハンドによる撮影(1~2台)、写真撮影により実施した。研究年度によって、調査の条件を若干変えているが、基本的に保育者は遊びの援助やトラブルの仲裁を行わず、子ども同士がどのように遊び、またトラブルに対応するかを観察することとした。保育者は、笑顔で子どもを認めたり、何を作っているかを尋ねることは行ったが、具体的に

積み方や遊び方を教えることはしなかった。

観察した日の午後、撮影した写真やビデオを見ながら、担当保育者と園長にインタビューを行い、日ごろの子どもの様子との比較や子どもの遊びで気づいたことなどを聞いた。

また、社会道徳的な雰囲気確立するために、集団づくりや話し合い活動が有効と考えられたため、めいつ保育園年長児クラスにおいて上記の活動を取り入れ、保育者のエピソード記録の分析を行った。

(4) 実践事例の国際比較として、イギリスとオーストラリアの幼児教育関連施設(イギリス7施設、オーストラリア6施設、計13施設)を視察し、施設長や保育者にインタビューを行った。

(5) 以上の研究成果を総合的に考察し、子どもの道徳性発達にかかわる認知要素について検討するとともに、道徳性育成のための指導法およびカリキュラムのあり方について考察を行った。

#### 4. 研究成果

(1) 道徳教育及び事例分析視点に関する文献研究から

子どもの道徳性に関する研究の展望と課題 (Spodek & Saracho(2006)より)

幼児教育における道徳研究には「認知的伝統」「情緒的伝統」「文化的伝統」の流れがある。ピアジェとコールバーグは認知的伝統を発展させ、論理と認知に関連する普遍的な道徳性があると考えた。情緒的伝統はフロイトの精神分析理論に由来し、ホフマンやアイゼンバーグらの研究に代表されるが、彼らは道徳的行動における共感や向社会的行動に注目している。文化的伝統はさまざまな流れがあるが、子どもの道徳性の決定的要因として文化を強調する。これらはそれぞれ観点が異なり、それぞれの研究視点から調査方法が提案され、各伝統内で幼児教育の指導法について議論されている。今後は、それぞれの立場を統合して総合的に研究する必要性が指摘されている。

#### 社会道徳的雰囲気に関する研究

Rheta Da Vries & Betty Zan (1994)による社会道徳的雰囲気に関する研究はピアジェやコールバーグの研究に依拠しており、幼児教育においても、認知的発達と道徳的発達が関連するという立場に立っている。さらに、ピアジェは道徳的判断に関する研究の後に、知的、社会的、道徳的、情緒的発達が分離できないことを一貫して強調していることを指摘している。Da Vriesらは、認知発達と同様に社会道徳的にも発達すると考え、「道徳的な教室」、つまり「社会道徳的雰囲気」をもったクラス集団をつくるために、「葛藤を解決すること」「グループ・タイムを設けること」「ルールを作ること」「投票を行うこと

と」「社会的・道徳的討論を行うこと」などが有効であることを指摘している。

#### 実践事例の分析と方法について

2歳以下の子どもの道徳性の発達に関しては行動面の観察調査が必要である。本研究では予備調査から、共同遊びの中でも条件を統制しやすい積み木遊びを選択した。

積み木遊びに関する先行研究としては、積み木の教育的意義を歴史的に抑えたもの、子どもの積み木遊びにおける発達を調査したものがある。後者については1人の幼児の遊びの事例を分析したもの、2人の積み木遊びにおける会話等を分析したもの、保育者の働きかけを分析したものがある。本研究では、子どもの道徳的認知発達に関わる諸要素を抽出するため、保育者の直接的な指導を制限した中で、子どもが自発的に積み木で遊ぶ様子を観察することとした。具体的には、クラス集団内における子どもたちの積み木の遊び方を「積み方」と「他者との関わり方」の観点から分析することとした。また、子どもが観察者に慣れ、自然に遊ぶ様子を分析するためと調査条件を統制するため、観察者が積み木の提示を行い、担当保育者は遊びの指導を行わなかった。また、共同遊びでどのようなトラブルが生じ、子どもがどう対応するかも観察対象としたため、担当保育者が観察調査中にトラブルへ介入することも制限した。

「積み方」には子どもの認識の発達が反映されると考えられる。「他者との関わり方」では、トラブルへの対応の仕方に子どもの認識の様相が観察できると考えた。

#### (2) 実践事例の観察と分析

予備調査(普段の遊び・生活の様子から調査の視点を定める)

保育園0~5歳児の自然観察を行い、文献研究の結果を踏まえて、調査対象を積み木遊びにすることとした。

子どもの積み木遊びにおける遊び方と他者との関わり方の分析【研究1】

積み木遊びにおける子どもの認識の発達に関する事例分析調査として、めいつ保育園0~5歳の遊びの様子を観察し、各年齢の遊びの特徴、他者との関わり方の特徴、トラブルの傾向などを分析した。他の2園は比較のために調査を行った。

遊びは一般に、「一人遊び 平行遊び 共同遊び ルールのある遊び」という順に発達すると言われているが、集団内での積み木遊びの観察を行った結果、一人遊び、平行遊び、共同遊びは1歳以上のすべての年齢で観察された。つまり、観察時間内で、1人で遊ぶ場合もあれば、2~3人で遊ぶこともあった。

分析の結果、年齢や遊び方によって、他者と共有しているイメージが異なることが示唆されたが、それが他者との関わり方に関連するのではないかと考察された(表1参照)。

【表 1 子どもの積み木遊びにおける共有イメージの違いと他者との関わり方】

共有するイメージの違い	他者との関わり方
1~2歳のまね遊び	
友達の並べ方や積み方を見て、真似して遊ぶ。 (模倣遊び・ふり遊び・見立て遊びではない) 今、目にしているものを見て、真似して遊ぶ。	友達との関わりよりも、保育者の承認・関わりを求める傾向が強い。
3歳以上の共同遊び	
何かを作るために協力して遊ぶ。 頭の中のイメージは必ずしも必要ではなく、目の前の作ったものが共有できれば良い。	実際に作ったもの(基本的には単純な積み方)なので、友達と目的を共有しやすく、協力して遊びやすい。
3歳以上の象徴遊び	
積み木で作ったものを何かに見立て、そのイメージを共有して遊ぶ。 個々の頭の中のイメージが共有されることが重要。	個々の頭の中のイメージが共有されることが重要なので、会話がキーポイントとなる。また、実際のものを忠実に模倣して作ろうという意識が出てきて、構造的な美しさが表現できるようになる。

子ども同士のトラブルの分析【研究2】

積み木遊び中の子ども同士のトラブルは大きく3つのパターンに分けられる。第1に、友達の積み木を突然壊す場合であり、1~2歳でよく観察された。第2は自分が作っている積み木遊びに友達を参加させない場合であり、これも1~2歳に多く見られた。第3に、友達が使っている積み木を黙って取ろうとしてトラブルになる場合である。これは1歳から4歳くらいまで観察されたが、2歳までと3歳以上では、トラブルの質が異なる傾向があった。

そこでまず、友達の積み木を突然壊す場合の事例分析を行った。1歳児のときからよく友達の積み木を壊す子どもA児(2歳11か月)に注目し、A児が積み木を壊さなくなった日の遊びの様子を詳細に分析した。その結果、大人からは突然、理由もなく壊している、あるいはわざと壊しているように見えていたA児だったが、他の積み木が壊れたことをきっかけに自分の近くの積み木を壊してしまう場面や、先に別の友達が壊したことに腹を立てて壊した場面が見られた。また、なんとなく触ろうとして壊してしまった場面も見られた。このことは、積み方が分からないために起こしている行為だと予測された。この場合は一緒に遊びながら、遊びを教えることが有効と考えられる。

そこで、同様に1歳児から友達の積み木を壊す傾向のあったB児(2歳11か月)に注目

し、積み木遊びの際に声掛けを行った。B児が友達の作ったものを指さし、「あれが作りたい」というので、傍について「作ってみよう」と声をかけた。B児が作りたかったのは字型の単純な積み方で、積み木を2つ、間を空けて並べ、その上に横に積み木を積むものだったが、B児は積み木を3つ縦に並べていた。このことは、B児が見た積み木の構造を理解できていないことを示唆している。したがって、他の幼児のように友達の積み方を見て模倣することができず、結果的に触っているうちに壊してしまったと考えられる。

以上の分析結果を踏まえ、道徳的認知発達に関わる諸要素について考察すると、「友達の作った積み木を壊してはいけない」といった規範意識の形成は、1~2歳の時期の子どもの認知的特徴と関連していると考えられる。友達と一緒に仲良く遊べるようになるためには、友達の遊び方の模倣行為ができることが必要であるが、それには友達の積み方・並べ方を見て模倣できる物体や空間に対する認識力と、それを自分の行為に結び付けて手をコントロールする力などが必要である。さらに、友達の遊びを模倣して、友達の積み木遊びに参加できることが「作った積み木を壊してはいけない」という認識につながっていると考えられ、それらの認識の獲得には子どもたちの感情が関係していると考えられる。したがって、2歳以下の子どもたちに対し、子どもの認識の発達を促す遊び方の支援をすることが子どもの道徳性の発達に影響するのではないかと考えられる。

子どもの認識の発達を促す積み木遊びの支援方法の検討【研究3】

3歳以上では、模倣行為が発展して、友達との共同遊びにつながると考えられる。一方で、共同遊びによって子どもたちの活動が制限されるケースがあった。それはドミノ遊びで、主に4歳児以上のクラスで観察された。研究当初、ドミノ遊びは子どもたちが積み木の規則性に気づき、協力する遊びとなりやすく、遊びのレベルとしては高次にあると考えていた。しかし、子どもたちのドミノ遊びの観察から、以下のような問題点が見えてきた。

第1に、ドミノの並べ方などを指示する子どもが出てくることである。リーダー格の子どもに従うばかりの子どもや、積み木を運ぶだけの子どもが出てしまい、リーダー格の子ども思い通りに並べないと怒られるという状況も見られた。第2に、目的が明確であるために、途中でドミノを倒してしまうと他の子どもたちに非難されることである。また、遊びを続けていくと、クラスのほとんどの子どもたちが積み木遊びに流れてしまう傾向が見られた。ドミノを長くつなげていく、という意味では協同しているが、象徴遊びのときのような豊かな会話や積み木の造形物の発展は見られず、黙々と積み木を並べる状況になっていた。

そこで、遊びの支援として、2年前の5歳児が作った積み木やその様子の写真を積み木遊びの前に子どもたちに紹介し、子どもの遊びの変化を観察した。その結果、それぞれが自由に作りたいものを作って遊ぶようになった。また、想像力を働かせて、少人数のグループで会話をしながら作るようになった。次の調査時には写真を見せなかったが、ドミノ遊びはほとんど見られなくなった。

この事例を道徳的認知発達に諸要素と関連させて考察すると、以下のことが考えられる。第1に、グループで協力しているように見えても、子どもの想像力や発想を制限するような遊びでは、子ども同士のトラブルが起こりやすくなるということである。ドミノ遊びのように目的が明確である遊びは4歳児以上において、共同遊びにつながりやすい反面、目的意識が強くなりすぎ、友達との協力が義務的になってしまうようである。第2に、ドミノ遊びでは人間関係が変化しづらいことである。ドミノ遊びでは自由に積み木遊びをしている場合のよりも、リーダー格の子どもが主導権を握り、遊び方に力関係が反映される傾向があった。第3に、遊び方のイメージを持つことが子どもの遊びに影響することである。第4に、目的が明確なドミノ遊びより、自発的に遊び相手を選んで自由に遊ぶ方が仲良く楽しく遊べるということである。

これらのことは、他者との協調性と個々人の創造性や自発性を同時に育む遊びが道徳性の発達を促すのではないかということを示唆している。同じ積み木を使った遊びでも、遊びの内容の質が問題となる。

子どもの道徳的認知発達に関わる諸要素の発達指標を研究仮説で設定したが、上記の研究から仮説の枠組み自体を再構成する必要があると考えられる。また、後述する幼児期の道徳教育の方法に関する国際比較の成果も含めて総合的に考察する必要がある。これらについては今後の課題とする。

話し合い活動を通じた道徳的な雰囲気づくりの実践【研究4】

Rheta Da Vries & Betty Zan (1994)によれば、「社会道徳的雰囲気」をもったクラス集団をつくるために、「葛藤を解決すること」「グループ・タイムを設けること」「ルールを作ること」「投票を行うこと」「社会的・道徳的討論を行うこと」などが挙げられている。これは我が国で行われてきた「集団づくり」の実践に類似している。そこで、「集団づくり」を行っている南方保育園の観察調査を行い、Da Vriesらの討論のポイント等を参考にしながら、めいつ保育園の年長児クラスにおいて、話し合いの実践を行った。

クラスで生活グループを作り、リーダーを決めて、年齢に合わせて、責任を持たせた仕事を任せるようにした。5歳児では話し合いでリーダーの仕事を決めるようにした。また生活の随所で話し合い活動を入れて、自分た

ちで考えたり、話し合ったりするような場を設定してもらった。例えば、発表会で実施する内容を話し合いで決めたり、生活の中で困っていることを話し合い、グループ活動で解決する実践を行った。リーダーには子どもたち全員がなれるようにした。子どもたちはリーダーになることを楽しみにしており、リーダーになると自分の仕事を意欲的に行うようになった。このような取り組みを通して、保育者の子どもへのかかわり方が変化し、子どもたちがお互いに助け合い、協力し合うような雰囲気を作れるようになった。

### (3) 実践事例の国際比較研究

#### イギリスの幼児教育関連施設の視察

イギリスでは2つのナーサリーと5つのプレスクールを視察し、道徳教育についての考えを施設長・保育者等にインタビューを行った。また、いくつかの施設では保育の様子も視察した。

視察とインタビューから、イギリスではMoral Educationという用語はほとんど使われていないことが分かった。しかし、道徳教育が行われていないわけではなく、道徳的な価値についてさまざま形で子どもたちに示されていた。その中でも「寛容」と「市民性教育」が重視されているようだった。ロンドン市内の視察したプレスクール3校ではすべて教室に世界地図が貼られており、友達のルーツがどこにあるかが示されていた。国際化が進むロンドンでは幼児期から世界の中の自分、多様な人種の中の自分ということを理解させようとしているようである。

#### オーストラリアの幼児関連施設の視察

オーストラリアでは3つのプレスクールと2つのチャイルド・ケア・センターを視察した。オーストラリアの幼児教育・保育の内容はイギリスに似ているが、大きな違いはヴィゴツキーの発達理論に基づいて実践を行っているということである。自由遊びやお話の時間なども設けられているが、プロジェクト・アプローチも採用されている。子どもの興味・関心、発達に即してカリキュラムを各園で構成するため、日々の子どもの観察(オブザベーション)を非常に重視している。

#### 道徳教育の方法に関するイギリス・オーストラリアと日本の幼児教育・保育の違い

イギリス、オーストラリアも日本と同様に、幼児教育において道徳教育を明確に意識して行っているわけではない。しかし、文化的な背景が異なるため、基本となる価値観が日本と大きく異なっている。特に、移民が増加しているイギリス、多民族国家のオーストラリアでは個々人の多様性の理解が重視されており、これが「寛容」という価値の重視やイギリスでの「市民性教育」の取り組みにつながっていると考えられる。また、個々人に違いがあることが前提なので、個々の得意分

野を伸ばす教育に力点が置かれている。これに対し日本では、「平等」が「同じことを同じようにできること」を意味しており、幼児教育・保育においてもそのような方法をとる傾向が見られる。このような文化的・社会的背景が教育・保育の考え方に影響していると考えられる。

#### 今後の課題

道徳教育の方法に関するイギリス・オーストラリアと日本の幼児教育・保育の違いを実践事例から分析することを試みたが、実際には各施設のカリキュラムと、国の教育の枠組みが大きく影響していることが分かった。

例えば、オーストラリアの幼児教育・保育のフレームワーク” BELONGING, BEING & BECOMING The Early Years Learning Framework for Australia” (2009) には5つの Learning Outcomes (学習成果) が示されている。その内容は「子どもはアイデンティティの強い感覚をもつ」「子どもは彼らの世界につながり、彼らの世界に貢献する」「子どもは幸福の強い感覚をもつ」「子どもは自信のある、熱心な学習者である」「子どもは効果的な伝達者である」である。このように、我が国の幼稚園教育要領・保育所保育指針等と比べると、観点が全く異なっていることが分かる。

このように教育方法・内容の問題を検討するうえで、カリキュラムと国の教育の枠組みとの関係を明確にすることがまず必要だと考えられるので、今後、カリキュラムについて国際比較調査を実施したいと考えている。

#### <参考文献>

Rheta Da Vries & Betty Zan (1994) *Moral Classrooms, Moral Children; Creating a Constructivist Atmosphere in Early Education*, Teachers College Press.,  
Johansson, E., (2006) Children's Morality: Perspectives and Research. In Spodek, B., & Saracho, O. N. (Eds). *Handbook of Research on the Education of Young Children. 2nd ed*(pp.55-83). NJ: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.  
The Australian Government of Education, Employment and Workplace (2009) BELONGING, BEING, BECOMING The Early Years Learning Framework for Australia, Commonwealth of Australia.  
日本道徳性心理学研究会編『道徳性心理学 道徳教育のための心理学』北大路書房、1992年。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計3件)

Kyoko Mukugi. Analysis on imitative behaviors of young children in block play.

16<sup>th</sup> Annual Conference of PECERA 2015 “PLAY: TIME, SPACE & PLACE”., Macquarie University, Sydney, Australia., 24 - 26 July 2015.

椋木香子 『『幼児教育の書簡』におけるペスタロッチーの道徳教育の方法に関する一考察』日本ペスタロッチー・フレーベル学会、第33回大会、大阪人間科学大学(大阪府摂津市) 2015年。

Kyoko Mukugi, Yumiko Taoka, Atsuko Morikawa. Analysis about the development of recognition of infants in brick play. 6<sup>th</sup> Biennial Conference of The International Froebel Society: “Play, Self-activity, Representation and Development”. Canterbury Christ Church University, Canterbury, UK., 26 - 28 June 2014.

〔図書〕(計1件)

椋木香子「第13講 さまざまな教育実践」矢藤誠慈郎・北野幸子編『基本保育シリーズ 教育原理』中央法規出版、2016年、145 - 156頁。

〔その他〕

「イギリスの幼児教育関連施設の視察・調査報告」(日本ペスタロッチー・フレーベル学会課題研究委員会(広島地区)発表資料、広島大学、2014年3月29日)

「カリキュラム(保育課程)開発に関する検討」(めいづ保育園合同研究会資料、めいづ保育園、2014年9月27日)

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

椋木 香子 (MUKUGI, Kyoko)  
宮崎大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号: 00520230

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし

##### (4) 研究協力者

西田 幸代 (NISHIDA, Yukiyo)  
鈴木 由美子 (SUZUKI, Yumiko)  
田岡 由美子 (TAOKA, Yumiko)  
森川 敦子 (MORIKAWA, Atsuko)  
工藤 道子 (KUDO, Michiko)  
野崎 秀正 (NOSAKI, Hidemasa)  
松野 仁英 (MATSUNO, Hitohide)  
松野 蓮香 (MATSUNO, Renko)  
松木 朋子 (MATSUKI, Tomoko)